



## episode 1 親から子へ、子から親へ 循環する宝物

作品『かばんうりのガラゴ』 島田ゆか 作・絵

投稿者 T・R さま(東京都)



『かばんうりのガラゴ』  
島田ゆか 作・絵  
文溪堂 1997年

「かばんうりのガラゴがいました。いろいろありました。終わり」

幼い私は、よく眠る前に母親に絵本を読むことをねだった。そのときはいつも『かばんうりのガラゴ』。秋の自然のような色使いと、かわいらしいキャラクターと、珍しいかばんがたくさんでてくる。わくわくして何度眺めても飽きない、大好きな絵本だ。

しかし、布団の上で目を輝かせる私から受け取ると、母親は渋々本を開き、冒頭のセリフを早口で言って、「もう寝なさい」と本を閉じてしまうのだ。もちろん、私からはプーイングの嵐だ。もっとちゃんと読んで。全部お話しして。だが、いくらねだってもまともに話してくれることはない。「もー！ ママのお話嫌だ！」保育園の先生のように、どうして最初から最後まで母はゆっくり読んでくれないのだろう。幼い私は首を傾げた。

自分で字が読めるようになり、自室で眠るようになると、いつしか母に絵本をねだることはなくなった。

そして、私の成長と入れ替わりのように母の入院が決まった。胃の病気だ。入院準備をする母は、大きな荷物バックの前で、ぽつりと「入院中は、ゆっくり眠れる……」と呟いた。その言葉を聞いて、どくりと心臓が揺れた。その声は、共働きで朝から晩まで働いて、365日家事をこなして、休む姿なんて見たことのない母から聞いた、初めての本音のように聞こえた。

ガラゴのように次から次へと与え、忙しかった母。たった30秒で終わってしまう眠る前の物語は、毎日疲れていた母のせめてもの妥協だったのだ。

「ママ！」私は母に声をかけた。「私、ママのお話も好きだった。ごめんなさい」いきなり何を言い出すのか、と驚いた表情を見せる母に事情を説明すると、何を気にしているのかと笑われた。

入院中の母には、絵本を差し入れた。もちろん、『かばんうりのガラゴ』だ。

今度2人でゆっくり読もうと約束をした。「省略はやめようね」母が言うと、病室の中で私たちは笑いあった。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2021」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。

医療法人元気が湧く 編『絵本はホスピタリティの宝箱 エピソード33』(かもがわ出版 2022年刊)



## ようこそ、島田ゆかワールドへ

「ガラゴ」といえば島田ゆかさん、島田ゆかさんといえば「バムケロ」と、キャラクターと絵本作家が連動していくのは、「バムケロ」ファンならではのパラダイムでしょう。

島田ゆか氏は、1994年出版の『バムとケロのにちようび』(文溪堂)で鮮烈なデビューを果たします。お世話好きな犬のバムと、やんちゃないたずらっ子カエルのケロとのやりとりは、子どもだけでなく大人の心をもつかんで、人気は爆発しました。

## 『ガラゴ』ってなんだろう？

絵本作家デビューから3年後、「バムケロ」シリーズ3作目を発行した翌年発表したのが、『かばんうりのガラゴ』です。“犬とカエル”コンビの次に島田氏が主演のモデルとして目をつけたのは、アフリカのサバンナ林に分布するショウガラゴ／ガラゴ科に属するサル仲間でした。図鑑で見たショウガラゴに、メガネザルの要素を少し追加して誕生した「ガラゴ」は、「バムケロ」と合わさって島田氏の絵本作家としての地位を確立するものとなりました<sup>1)</sup>。

島田ゆか作品に夢中になってしまうのは、メインストーリーを楽しむと同時に、ページの画面隅々に至るしかけにあります。メインストーリーと別に、サブキャラクターたちのお話が展開されているのです。さらには、島田作品のシリーズをまたいでキャラクターたちが登場するので、すべての作品がつながっているようで、その島田ワールドに魅了されてしまいます。

「ガラゴ」のお話には「バムケロ」のキャラクターを発見すると、ワクワク感はヒートアップし、誰かに教えたくなる衝動に駆り立てられます。そして、島田作品を読む喜びを誰かと分かち合いたくなるのです。

## 絵本の喜び、教えます

島田ゆかファンだけが知っている秘密をお教えし

ましよう。デビュー作である『バムとケロのにちようび』の浴室に、ガラゴそっくりの小物入れが描かれているのです。1994年に初版が発行されて3年間は気づくことのなかったアイテムは、1997年のガラゴ登場後に、「バムケロ」を読み返した読者のテンションをマックスにするには容易でした。

作者の意図はわかりませんが、ガラゴ誕生の伏線が「バムケロ」第1作にあったというわけです。それだけではありません。2002年発行の「ガラゴ」2作目となる『うちにかえったガラゴ』では、バムケロ4作目『バムとケロのおかいもの』(1999年)で登場した市場の出店者や買いもの客たちの一部が、ガラゴの友だちであることが判明します。このようなネタバラシをすると、島田作品を読んでみたくなりませんか。随所にちりばめられた、心くすぐられるしかけは、何度読んでも新しい発見が楽しく、言い換えると、新たな発見をするために何度も読みたくなるのです。

## 絵を読むコドモ、字を読むオトナ

本誌で連載した「臨床の中に活かす絵本」の第6回でお話しました「絵を読むコドモ、字を読むオトナ」を覚えていますでしょうか。「絵を読む」小さな子どもたちは、「バムケロ」や「ガラゴ」シリーズの絵を読む楽しみに浸っているのです。想像力を刺激する島田ゆか絵本は、物語文学の入口ともいえるでしょう。

登場する者たちの表情ややり取り、ボケやオチに至るまで笑いの止まらない島田ゆか作品ですが、作品間のつながりは深いメッセージにも映るのです。すなわち、誰もが、自分が主人公の物語を生きていて、しかし周りの人たちの人生では脇役の一人になり、それぞれがかかわりあいながら、認め合い、構築されているということです。

だから、絵本はホスピタリティの宝箱なのです。

### 文献

1) 月刊MOE編集部：島田ゆか 絵本の秘密～ガラゴ20周年すべてみせます！, 月刊MOE 39(11), pp.6-32, 2017.